

第一章

「え…？」

女は自分の口を両手で塞いだ。光が漏れる食堂から聞こえる男たちの声。ステラが大好きな男たちの声。そこから聞こえてきた予想もしていなかった言葉に、女は唇を噛みしめる。そしてヨタヨタと歩き、暗い廊下の奥へと消えていった。

「あっはっは！ 楽な仕事だったなあ！」

「むぐー！ むぐー！」

「足が悪くて杖使ってる女を攫うなんて楽なもんだ！」

「むぎいー！ むぎいー！」

「おい、うるせえなあ！少し黙ってろ」

「っ！」

全員、とんでもなく身長の高い薄汚れた茶色の髪の兄弟らしき男2人と、黒髪の男一人がステラを睨みつける。

「…はは！人間なんてちよろいな」

「むぎいいいいいい！」

「こ、こら、静かに」

「ぬぎいいいい！ぎいいいい！」

「うわ！さっきより暴れ出してる！静かに！ほら、落ち着け」

「むぎいいいいいいいい！」

「暴れたら危ないだろ！落ち着いて！」

「むぎいいいいいいいい！」

「…ほんつとに言うこと聞かねーなあ、こいつは！」

「おい、商品に傷つけたくねーんだよ、ほんとに黙れ！」

「むきやああああ！」

ステラの絶叫が暗い暗い森に響き渡っていた。

果てしない程に長く続いたらしい魔族と人間たちの戦争は50年前に終わりを告げた。理由は単純で、魔王が人間に一目ぼれしたかららしい。魔王と人間代表の国の王との間で話し合いの場が持たれ、魔族と人間の共生が始まった。

最初はもめ事も多く、各地で一触即発の危機もあったようだが、50年もたてば大分落ち着き、今ではたまたに魔族と血気盛んな騎士たちがやり合うぐらいの程度のものとなってきている。

ステラ・アレミニウムは小さな小さな国の姫だった。白銀色の美しく長い髪だけが自慢で、顔も身体つきは平凡な20歳。広大な自然が広がる土地で動物や食べ物を育て、それを近隣諸国に売ることしかできない兵力も権力も持たない小さな国。いつ他国からの侵略を受けるか分からない国。

ただ、この国民、国を異常に愛していた。誰もが自分自身の在り方、生き方に満足し、幸せに生きる国。金にも権力にもそこまで執着せず、「自分という最高な生き物」を自負し、「生きていくだけで幸せ」だとにかくこ顔で毎日を送っているのだ。

そんな国のお姫様であるステラは、それはそれは自己肯定感が高かった。小さい頃は病気がちで、両足は生まれつきうまく動かせない。幼少期はただただベッドに横たわる毎日だったが、家族に召使に国民にどっぷり愛されて「世界一可愛くて優しくてキュートなステラ」は完成した。

そんなステラが、魔王の直系の血筋である魔族の婚約者候補に挙げられた。

何でもいつまでたっても伴侶を見つけない兄弟魔族に業を煮やしたご両親が、人間の国に助けを求めてきたらしい。「このままでは由緒正しき魔族の血筋が途絶えてしまう」と。最近すっかり魔族と仲良くなった人間の国の王による提案で「たくさん女の子を集めれば、その中から見つかるんじゃないか？」作戦が決行された。魔王の息子の嫁になると言えば、パーティーやらなんやらに出席しないとダメだろうと足の悪いステラの両親は、流石にお断りを入れたのだが「全ての人間の国から候補者を出してくれて言われてるから！」と却下され、えっちらおっちら魔王の城までやって来たのだ。

その城のとんでもなく豪華な応接室でステラが対面したのは、この世のものとは思えない程に美しい兄弟だった。一人はシミ一つない美しい白い肌に金色

の短髪、紫紺の瞳の美丈夫、そしてもう一人は同じ色のウェーブの髪を腰の辺りまで綺麗に伸ばしているまつ毛バサバサの女性よりも美しい男だった。そして、二人とも椅子の上で踏ん反り返っていた。虫けらでも見るような目でステラを見ていた。

しかし、そんなとでめげるステラではなかった。

（これが魔族流の礼儀作法なのね！）

自分が侮られるとは少しも思っていないステラは、嫌味でもなんでもなく本当にそう思い、自分の手でいそいそと動かない足を動かし、二人の魔族のように足を組んでふんぞり返った。すると、二人は不快そうに眉を上げたので、ステラも同じようにした。そこから、一向に二人が話し始めないので、ステラは勝手に鞆から紙とペンを取り出して話し始めた。

「ご趣味は？」

「は？」

「あ？」

「ですからご趣味は？」

「趣味？」

「なんでそんなこと…」

「結婚相手をお探しなんですよ？趣味の相性などは大事ですよ。私の城に勤めるメイドも言っていました。外に遊びに行くのが好きな人と家にいるのが好きな人が結婚すると地獄だって。お二人はどちらですか？ちなみに私は足が動かないので家にいる派と思いきや、お外に行く方が好きです」

二人の情報をメモしようと紙とペンを持ち、ワクワクと目を輝かせるステラを、二人はぼんやりと眺めていた。そして、短髪の魔族の方が先に口を開く。

「…俺は家にいる方が好きだ」

「…っグラニオ！」

「…お前もちゃんとやれ」

「ちっ！……はあ、分かったよ。…俺も家で過ごす方が好き。だから君とは合わないと思う」

「嘘付くな。お前はいつも出かけてるだろ？」

「兄さん！」

「そうですか、ふむふむ。ではえっと、グラニオ様…でよろしかったですか？」
ステラが名前を呼ぶと、グラニオは顔を顰め、凄まじい目つきでステラを睨みつける。

「人間ごときが俺の名前を呼ぶな」

「あ、はい。では兄魔族様とお呼びしますね」

「なんだそのふざけた呼び名は…」

「兄魔族様はお家でどんな風に過ごすのが好きですか？私は読書したり料理をしたりするのが好きです。あとはダンスとか！」

「…その足でダンスか？」

グラニオが鼻で笑った後、ステラのやせ細った足に視線を向ける。もう一人の魔族もプツと吹き出した。

「人間っての脆弱だね。自分の体一つ満足に動かせないなんて。そんな足でどんなダンスを踊るのかな？」

「ええ、今ご覧にいます」

にっこりと笑ったステラは椅子に立てかけていた杖を取り立ち上がると、杖と足に「ふむう！」と気合を入れて魔力を込め自分の体重を支える。そして広いスペースに移動すると、自分で歌を歌いながらクルクルと舞い始めた。

「ふふ、あはは！」

心底楽しそうに舞うステラから二人は視線を外さない。汗だくになってやつと踊りをやめたステラはよたよたと歩きながらソファに戻った。

「はあはあ……！ 魔力をかなり消耗するので、ちょっと大変なのですが……。いかがですか！ 国民には『ステラ姫の踊りはいつ見ても元気が貰える』と大好評で！」

「えっ！ そ、そんなはずは！」

ステラがショックを受けたと言った表情で口に手を当てると、黙り込んでいた長髪の魔族がプルプルと震え始め、そしてとうとう腹を抱えて笑い始めた。

「あっはっはっは！ へったくそ！ すっげーへったくそじゃん！ ドタドタして、ステップもぐちゃぐちゃ！ と、鳥がクイクイッって頭を動かしてるみたいなの動きなんなの!? 年頃の女の子、しかも一国の姫があんなにドタバタと！ あっはっは！ しかもすごく楽しそうだし！ 何なんだよ、もう！ あっはっは！」

「私の踊りは国一番と評判です！」

「やめて！もうやめて！無理だつて！あんな踊りで国一番にはなれないって！いや、確かに国一番かも！あっはっは！」

「ふん！そうやって笑っていいばいですよ。いつか私と一緒に躍らせてくれと手にキスして懇願することになりますから。私が踊ればどんなに元氣のない人でも立ちどころにやる氣が湧いて来ると評判で！」

「あっはっはっは！そんな訳ないじゃん！あっはははは！やめて！やめて！ほんとに死んじゃう！笑い死んじゃうって！」

「…失礼な。兄魔族様もそのようにお思ひですか？」

「ぶはっ！…い、いや、俺は…っ」

どう見てもグラニオも笑いをこらえていて、ステラは不機嫌そうに唇を尖らせる。

「…お二人とも本当の情熱的なダンスを見たことがないからです。私のダンスをたくさん見たら、本当の魂の踊りとはどんなものなのか理解できるはずですよから」

「あっはっはっは！まだ言ってる！」

「…ルオン。すまない、馬鹿にするつもりは」

「いいです。それでは質問を続けますね。えっと、まだ二人のご趣味を聞いてませんでしたね。まあ、言いたくなくればいいですけど」

「はは！俺はね、女の子と出かけるのが好きだよ。女の子ってふわふわで可愛いし、体も気持ちいいから。セックスするのは大好き」

「ふむ、セックス。それはどんなものですか？」

ルオンがニヤニヤと笑いながら話す。ステラは真剣な顔でルオンの趣味の欄に「笑い上戸」「セックス大好き」と書き込むと顔を上げてルオンを真っすぐに

見つめる。

「女の子とするんですよね？運動みたいなものですか？気持ちいいなら、一緒に体を動かすとかですか？」

「…」

「…ステラ…嬢といったか、君は」

「はい」

「年は？」

「20歳です」

「そうか…」

「兄さん、人間って成人を迎えてもセックスって知らないもんなの？」

「…この前寝室に放り込まれてきたやつと成人を迎えた人間はお前の上で立派に腰を振ってたと思うが？」

「だよね…」

二人の魔族がしげしげとステラを眺める。ステラはきよとした顔で首を傾げる。

「それで！弟魔族様、そのセックスとやらを教えてください！」

「…あー、乗馬。乗馬が趣味」

「セックスは!？」

「セックスって言わないの」

「なんで！なんで教えてくれないんですか！私ももう立派なレディなんですよ！」

「立派なレディはセックスを連呼しないの。ちょっと兄さん、なんか黙らせるものなの！」

「…菓子は好きか？」

「好きです!!」

すると弟魔族のルオンがテーブルの上に置いてあったベルを鳴らし、部屋に入って来たメイドに「ありったけのお菓子持って来て!」と焦って命令していた。

「おいひい!」

「…喉に詰まるからゆっくり食べろ」

「これ、これが特に美味しいです!」

ステラがお皿の一面に小さく盛られていた不格好なジャムクッキーを指差す。すると二人は目を見開いて、不自然に目を逸らした。ステラはそこのお菓子だけを手に取り、先ほどからもぐもぐと食べ続けている。

「…なんで?」

「なんで？だって一番美味しいです！それに焼きたてです！私のことをおもてなししようと思って優しい誰かが時間を合わせて作ってくださったんですね！」

ニコニコと笑うステラを呆然と見つめていた二人の顔がじわじわと赤く染まってくる。

「そ、それは…、俺たちの母さんが作ったんだ。…将来のお嫁さんのためにって、候補者全員に作ってる。…誰も手を付けたことはないけど」

「…人間の国の王都から取り寄せた豪華な菓子と比べたら見劣りするだろう？無理に食べなくてもいい」

そう言ってグラニオがジャムクッキーを取り上げようとする。

「な！独り占めしないでください！」

それより前にステラが全てのジャムクッキーを自分の皿に移動させ、その皿

を膝の上に乗せる。

「お、お二人は毎日食べられるのでしょうか？私は今日だけなんですから譲ってください！」

「っ、俺たちが母さんを大事にしているってのを知ってて取り入るつもりか！」
「お母様を大事にするのは当たり前です！私もお母様が大好きです！お母様の作るパイは絶品です！」

「や、やめろ！可愛く見えてくる！可愛くないのに！」

ルオンが頭を抱えてブツブツと呟いている。ステラはクッキーを奪われないようにグラニオを睨みつけながら口を動かし続ける。

「…取らないからゆっくり食べろ。詰まるぞ」

呆れたように笑ったグラニオがステラのカップにお茶を淹れてくれた。

コンコンと扉がノックされ「時間です」と外から声を掛けられる。クッキーを独り占めして、グラニオが淹れてくれたお茶を飲んでいたステラはその言葉を聞き、杖に魔力を込めて立ち上がった。

「それではごきげんよう。お二人が素晴らしい伴侶を見つけれられることをお祈りしております」

そう言って頭を下げ、ステラが退室しようとするが、その前にグラニオが部屋の扉を開け、外にいる執事に指示を出していた。

「ステラ嬢はしばらくここに滞在する。ご家族にもそのようにお伝えしろ」

「は、かしこまりました」

執事はすぐに踵を返す。ステラはポカンと口を開けてその様子を見ていた。

「あ、あの…」

「…母さんのクッキーが好きなんだろ？夕食にも食べられるようにお願いして

おく」

「や、やったー！」

ステラは元気に拳を突き上げた。

「…なぜ抱き上げられている」

「？足が動かないので」

「…先ほどは杖を使っていただろ」

「人が多いところだと動きが遅いと迷惑なので、執事などに抱えてもらってお願いします」

用意してもらった部屋で少し休み、身だしなみを整えていると夕食の用意ができた執事から扉をノックされた。ステラが執事に抱きかかえられながら会場に向かうと、そこにはステラのほかに数十人の美しい姫たちが集まっています、

順番にテーブルに座っている。そしてステラが案内されたのは末席の末席、グラニオとルオンがやっと見えるかという程に遠い場所だった。

（なるほど、さっきのは最初の試験で、これが第二試験ということね）

一人で勝手に納得していると、背後から声を掛けられる。振り向くとそこには顔を顰めたグラニオがいた。そしてなんだか意味が分からない文句を言ってくる。ステラは適当に返事をしながら、グラニオが手に持っている焼きたてのジャムクッキーに視線を奪われていた。

「…人の話を聞いているのか？」

「あ、あのそのクッキー…」

「…ああ、母さんが追加で焼いてくれた。ほら」

「ありがとうございます！」

それを笑顔で受け取る。グラニオはなんとも言えない顔をして姫たちがずら

つと座っている長テーブルを眺めていた。

「…こんな端の席で申し訳ない」

「どこで食べても料理の美味しさは変わりません」

「…そうだな」

ステラの言葉にグラニオは目を細めて笑う。

「…楽しんでくれ」

そう言ってグラニオは遠い自分の席へ戻っていく。そんなグラニオをうつとりとした顔で見つめていた姫たちはバクバクと不格好なクッキーを食べ始めるステラを見て（多分…ペット枠ね）と勝手に結論付けて、哀れみの表情を向けていた。

（美味しい…美味しすぎる…！魔族のシェフってこんなに料理上手なの!?これ

はぜひうちの城にスカウトしたい！」

そんなことを真剣に思いながら、ステラはひたすらに目の前に出された食事を平らげていく。チラリとほかの姫たちに視線を向けると、食事そっちのけで二人の魔族に話しかけたり、うっとりとその美しい容姿を眺めたりしていた。そのほとんどが食事に手を付けていない。

「食べた方がいいですよ」

「え!? な、なんです!？」

隣に座っている美しい姫にステラは声を掛ける。

「お腹空いてるんじゃないですか? とっても美味しい料理ですよ!」

「はあ…。…わたしくしは食事をしにこの国に来た訳ではございませんので。

…魔族に見初めていただくためにわざわざこんな所まで来たのです」

「見初める…?」

「ええ、強大な魔力と美しい容姿、そして権力と財力。全てを兼ね備えた魔王のご子息お二人に選んでいただくためには食事などしている場合ではありません！」

美しい姫はわざとらしい程にうつとりとした顔で熱弁し始める。

「あの美しい顔が…んふ…んふふ♡」

姫がクスクスと笑い、グラニオたちに視線を向ける。

「…？」

その視線に違和感を覚えたステラが何の気なしに言葉を発した。

「魔族がお嫌いで？」

「っ！そんな訳ないでしょう！」

「わぁ！」

姫が顔を真っ赤にして立ち上がる。すると必然的にステラ達に視線が集まっ

てしまった。

「食事中に騒ぐとは一国の姫がマナーも身に付けていないのか？そんな女に婚約者の資格はない。出て行け」

かなり遠くにいるはずなのにルオンの声が会場に朗々と響き渡る。

「っし、失礼いたします！」

姫はキツとステラを睨みつけた後、部屋を出て行く。ステラもまたペコリと頭を下げた後、杖を使ってヨタヨタと部屋を出た。ゆっくりと豪華な廊下を進んでいると、先ほどの姫が目を吊り上げて待っていた。

「あなたのせいで、わたくしまで追い出されてしまったではないですか！…足も満足に動かせない女が魔族の伴侶になろうとは。…厚かましい」

「私は世界一可愛くて優しくてキュートなので、全く厚かましくありません」

「なんて厚かましい!!」

姫は顔を歪めてステラの片方の足を蹴った。

「きゃあ！」

「あら、足が滑りましたわ」

「ぶっ！」

「なんて無様な！これは先ほどの仕返しです！…目立ちたくなかったのに、余計な真似を!!」

そう言って姫が足早の去っていった。

「…今度会ったら髪の毛引っ張ってやる」

ブチブチと文句を言いながらステラが立ち上がろうとすると、サツと大きな手が差し出された。視線を上に向けると、そこには呆れた顔をしたルオンがいた。

「潰れたカエルみたいになってたよ」

「潰れたカエルみたいになっても私は可愛いですから」

「その自信、ほんとどこから湧いてくるの？」

ルオンがしゃがみ込んでステラを抱きかかえる。かなり近くで見える美しい顔に、ステラはちよつとだけ恥ずかしくなった。

「あ、あの、自分で立てますから。それか執事を呼んでいただければ……」

「ダメ」

「え!?自分で歩けと!？」

「∴君を抱きかかえられるのは俺か兄さん、もしくはもう一人だけだ」

ルオンの紫の瞳が一瞬だけ光る。すると暗がりから艶やかな黒髪にルオンと同じ色の瞳の色をしたステラよりも二つ程年下に見える美青年が歩み出てきた。

「何か御用ですか？」

「ビボル、この子の世話を」

「…俺はあなた様とグラニオ様だけにしか従うつもりはありませんが？」

「いいから世話をしろ」

「…かしこまりました」

ビボルと言われた青年は全く納得していませんという顔で頭を下げ、ルオンの手からステラを受け取った。

「俺は会場に戻るから。君は部屋に戻れ」

「あ、さっきは迷惑かけて申し訳ありませんでした」

ステラが先ほどマナー違反だと怒られたことを謝ると、ルオンはプイッと顔を背ける。

「…君に言った訳じゃなかった」

「え…？」

詳しく聞こうにもルオンはスタスタと歩いて去って行ってしまった。

「…お部屋まで送ります」

「あ、ありがとうございます」

ステラを抱えたビボルは無表情で歩き続ける。そして部屋のソファにステラを下ろすと、冷たい目で見下ろして来た。

「僕はグラニオ様とルオン様にしか従わない。勘違いするなよ、劣等種」

「…僕が本気になれば君なんて一瞬で殺せる。分かてるのか？」

「ビボル、あれ！あれ取って！あの木の実が欲しい！」

「聞きなさい！僕は召使じゃない！」

「じゃあ自分で行く！」

「こら！この前も一人で水浴びするとか言って勝手に噴水に飛び込んで大惨事になっただろ！僕が取るから！大人しくしときなさい！」

一か月後、ビボルとは大分打ち解けた。きっかけは良く分からないが劣等種と言われて激昂したらかなり驚かれた気がする。

「この私に向かって劣等種だなんて！あなた頭でもおかしいの！」

「は！醜い人間が何を馬鹿なことを！偉大なるドラゴンである僕に人間風情が口答えなどするな！」

「はあ!?なら私は偉大で可愛くて優しくてキュートなステラよ！ただのトカゲ風情が口答えしないでちょうだい！」

「な、なんだと！僕とお前、どっちが優れていると思っている！」

「そんなの勝負してみないと分からないわ！」

「ならやってみるか？劣等種へのハンデだ。何で勝負するかはお前に選ばせてやる！」

「ダンスよ！」

騒ぎながら二人が用意された部屋へと入って行く。その数分後に、ビボルの
とんでもなく大きな笑い声が廊下まで響き渡った。

「ズ、ズルいぞお前……！」

「何がズルいのよ！笑い過ぎよ、最低！」

「な、なんでその踊りで勝負を挑もうと思うんだ。お前はバカなのか！」

「得意だからよ！」

「ぶっ！やめろ、もうやめろ！そのみょうちくりんな動きで僕を翻弄するな!!」
汗だくになるまで踊ったステラはゴロンと床に倒れ込む。ビボルも床に胡坐
をかいた。目尻に溜まった涙を腕で拭っているビボルのお尻からゆらりと真っ
黒な鱗に覆われた尻尾が生える。

「あら、尻尾！」

「っ、み、見るな！」

ビボルが鋭い目つきでステラを睨みつける。

「なんで隠すの？見せて、すごく綺麗だった」

「…これでも綺麗と言えるのか？」

ビボルが鼻を鳴らしてもう一度尻尾を出し、ステラの目の前でビタン！と床に叩きつける。よく見るとその鱗にはびっしりとドス黒く濁った汚れのようなものがこびり付いていた。

「お前たち人間たちがかつて放った呪いで僕の美しい鱗は穢れた。どれだけ浄化魔法をかけようと消えない。僕はお前ら人間のせいでドラゴン族からも穢れた存在だと見放されたんだ！お二方が僕を拾ってくれなければ、一生一人で…！」

「…ちゃんとお風呂で洗ったの？」

「は？」

「ちょっと来て！」

「お、おい！」

ステラはよたよたと立ち上がると、ビボルの手を引き、歩き出す。

「一体何を……！」

「汚れてるなら洗えばいいのよ！」

「だから、魔法で！」

「自分の手で洗うの！何度も何度も洗うのよ！」

「そんなことでこれが消えるのなら僕は！」

「じゃあやるの！」

ステラは浴室のバスタブにビボルを押し込むと、自分は椅子を持って来て大きな尻尾を抱える。そして体を洗うために置いてあった布でゴシゴシと鱗を拭

き始めた。

「や、やめろ！汚いだろ！」

「そうね！汚いわ！ちゃんと洗わないからよ！」

「こ、こら！や、やめろ！」

「ん？鱗と鱗の間にこびりついてるわね。んしょと。おりゃ！」

「ひっ♡ま、待て♡んう♡そ、そこはいい♡こら、んう♡」

「頑固な汚れねえ…んしょんしょ」

「汚いだろ！これまで誰も触ろうとしなかったんだ！離せ！」

「動かないの！」

「っ♡」

ステラの小さな手がべしんとビボルの尻尾を叩く。

「大丈夫よ！汚いなら綺麗にすればいいの。きっと綺麗になるわ」

「そんな訳ない…。そんな…。そんな訳…」

ビボルの顔がくしやりと歪む。

「大丈夫！私を誰だと思っているの？世界一可愛くて優しくてキュートで賢いステラなのよ！それに諦めも悪い！絶対に汚れを落として見せるわ！」

涙目のビボルが顔を膝に埋めたまま、小さく頷いた。

「…ステラ嬢は何をやっているんだ」

「俺にも分かんない。ほんと、あの子、意味が分からない」

執務室で仕事をしているグラニオとルオンは城内の広い庭に丸まっているドラゴンの姿のビボルとその隣でぎゃいぎゃいと騒いでいるステラを見下ろす。

「…珍しいな、ビボルがドラゴンの姿なのは」

「確かに」

二人が考え込んでいると、下から「痛い痛い痛い！」というビボルの悲鳴が聞こえてきて目を丸くする。

「そんなチクチクする掃除用具で僕を擦るなんて！ドラゴンをなんだと思ってるんだよ！」

「汚れが溜まってるんだから仕方ないでしょ！ほら、大人しくしてて！私は足の突っ張りが効かないんだから！んしょんしょん！」

「ぎゃあああ！痛い痛い痛い！鱗の間は繊細なんだからもっと優しくしろ！」
城中に響き渡るビボルの悲鳴に顔を見合わせたグラニオとルオンは窓を開いて、そこから飛び降り、中庭に降り立った。

「何を騒いでいる？」

「うるさくて仕事に集中できないんだけど？」

悲鳴を聞いて、城で働く魔族や滞在している人間の姫たちも集まって来る。

しかし、その大半がビボルの汚れた体に顔を顰めて近づこうとしない。

「あら、兄魔族様と弟魔族様。ごきげんよう」

「…その呼び名はなんとかならないのか？」

グラニオが眉間の皺を指で伸ばしながらため息を吐く。

「名前を呼ぶなと言われましたので。ほら、ビボルが大きい声出すからでしょ！お口を閉じなさい！」

「横暴！ドラゴン虐めだろ、これ！」

「もう！我が儘ドラゴン！仕方ないわね、鱗の間は手でやってあげる」

そう言ってステラは柔らかい布を手につつと、鱗と鱗の間に手を入れて優しく手を動かし始める。

「んッ♡っあ…ふっ…あ♡そ、そこ…は…ッ♡」

「ここ？ここが気持ちいいの？」

「うん…こ、こら…そこは…くっ♡」

「ここね？んしょんしょ…きやつ！」

一生懸命動かしていたステラの手をルオンが掴んで引っ張り出す。

「な、なんですか？」

「ビボル？」

「…僕は悪くありません」

「なら俺がしてやる」

「え？い、いや…っぎゃあああああ！優しく！もっと優しくしてください！」

ルオンが非常に乱暴な手つきでビボルの鱗の間を拭っていく。それを見て、鱗の間の掃除はルオンに任せようと判断したステラは、先ほどビボルが嫌がったブラシを持ってゴシゴシと鱗の表面を削っていく。

「んしょんしょ！」

「…ステラ嬢、一体何をしているんだ？」

「何って、掃除です」

グラニオは顔を顰めてステラを見下ろしている。

「…人間の呪いがたかが掃除で消えるって？」

「…呪いなんて汚れみたいなものですよ。人間が作った魔法なら人間の力で消せるはず！物理的に何度も擦ってやればいいんです！呪いだって何度も何度も拭かれたら『もういやだ〜！』ってなります」

「…そんなもので消えるのなら誰も苦労はしていないッ！」

グラニオの感情を抑え込むような声に、ステラは顔を上げて、まっすぐにグラニオを見る。

「魔法で浄化はしても、誰も物理的に掃除はしてくれてないんですよね？」

「…」

沈黙は肯定だった。人間との争いに駆り出された幼い竜。人間が生み出した穢れの呪いに犯され、同族から見捨てられた美しい希少種の幼竜は死にかけていた。それに魔王の息子である二人分の血と魔力を注ぎ込み、命を繋いだ。その日から竜は二人の弟になった。しかし、その見た目の醜さに誰も彼に触れようとはしなかった。ビボルもいつしかドラゴン族の誉であるその勇壮な体を見せなくなった。

「…女性に汚れを嫌うと聞くが？」

「主語が大きい話は好みません。それに私は世界一可愛くて優しくてキュートで賢くて諦めが悪いので、こんなちっぽけな汚れには負けないんです…。つほら！やっぱり綺麗になった！ビボル！ほら、見なさい！ちゃんと体を洗わないからよ！」

「そんなはずッ……………つは、はは…嘘だろ…」

ドラゴンの声が震える。グラニオとルオンが目を見開く。

「ステラに不可能はないのよ！」

ステラが磨いていた鱗の汚れは一部はげ落ち、その下から美しく輝く黒曜石の色が覗いていた。

「ほら、スーちゃん」

「ありがとうビボル」

羽だけを出して高い場所になっていた木の実を取ってきてくれたビボルにお礼を言うと、ステラがそれを齧る。

「おいひい」

「服が汚れてる。今日はお二人との２回目の面会だろ？」

「ああ、そうね」

この城に滞在して2か月。やっと二回目の面会が回って来た。なんでも流石に大量の婚約者候補と会い続けるのは大変すぎるということで、一回目の面会でその数は半分に減らされたらしい。そしてひと月が経ち、ステラにやっと次の順番が回って来たのだ。

「魔族の王子様って大変なのね。私もお姫様だけど、いつでも会えるお姫さまって国民からも評判だったわ」

いつの間にかビボルの膝の上に乗せられていたステラはむしやむしやと木の実を食べながら物思いに耽る。

（二回目の面会は夜なのよね……。一体何をするのかしら）

「こら、ステラ。口から零れてる。聞いているの？こら、汚れてるって！ねえ、ほんとに聞いているの!？」

「よし！そろそろ行くわよ」

与えられた部屋で髪をとかしていたステラが意気揚々と立ち上がろうとするが、その前に扉をノックする音がした。

（今日は自分で歩いて行くから誰も呼んでいないはずだけど…）

首を傾げながら「どうぞ」と返事をする、グラニオとルオンが部屋に入ってきた。

「え？あ、あれ？申し訳ありません、私がお部屋まで行くつもりだったんですが、時間に遅れてしまいましたか？」

焦ったステラが立ち上がりとするが、足に力が入らず床に倒れ込みそうになる。それを長い足を動かし一瞬で距離を詰めたルオンが抱きとめた。

「危ないだろ。立たなくていい」

「で、でも流石に座ったままでお迎えするのは失礼です」

「俺たちがいいと言ってるんだ。ルオン、連れてこい」

「はいはい」

ルオンはステラを横抱きになるとベッドに腰掛けたグラニオの膝の上にステラを座らせた。

「ひっ！ちよ、あのなんで膝の上に…？」

「…二回目の面会では体の相性を見る。」

「その…体の相性とは…？どうやって体の相性を見るのでしょうか？」

「…ステラ嬢、何も怖いことはない。それにこれからすることは恥ずかしいことでもない。好きに声を出して構わない」

「そ、そんなに激しいことをするのですか？」

ステラが少しだけ不安そうな顔でグラニオを見る。寝間着のラフな格好でいつも綺麗に整えられている髪を下ろしているグラニオはとんでもなく色っぽく

て、ステラはドキドキと高鳴る胸の鼓動を抑えられない。グラニオは優しく微笑んでステラの手を取ると、そこにキスを落とした。

「大丈夫だ。…俺もルオンも君を絶対に傷つけないと約束する」

「君はただリラックスして俺たちに身を任せるだけでいい」

「は、はい！」

ステラが元氣よく頷くと、二人は楽しそうに笑った。

「ひっ…んう♡ん…ふう…んああ♡」

「そうそう、上手だ、ステラ。もう少し体の力を抜けるか？」

「ひう…こ、こうでしょうか？」

「そうだ…んう♡」

「ひい♡♡」

（なにこれ…！なんなのこれえ！）

ステラは、背後から自分の胸の先端をカリカリ♡と引っ搔くグラニオと自分の足を開かせ、内ももにちゅうちゅう♡と何度も吸い付いているルオンにか細い悲鳴を上げさせられていた。

ぢゅうううう♡

「やあ…う♡」

「ん…♡ごめん、痛かった？」

強く内ももを吸い上げられたステラが体をびくつかせると、ルオンが顔を上げてコテンと首を傾げる。

「な、なんでこんなことを…！」

「だから体の相性を見るって言ったでしょ？」

クスクスと笑ったルオンが、寝間着の奥にあるステラの性器を下着越しに指

でぶにぶに♡と押し込む。

「あ、相性って一体…」

「…ご両親は君がどうやって生まれたのか教えてくれなかったか？」

「ひっ…♡」

グラニオが背後からステラの耳元で囁いた後、ちゅう♡と耳朶を食む。

「お見合いの条件にあったでしょ？魔族の後継を生むことって」

「ひゃああ♡」

ぐう♡とルオンがステラのドレスの中に頭を突っ込んできて、舌でツンツン

♡とまんこを刺激してくる。

「後継を生むって、子作りのこと…んう♡ですか？」

「ああ、子作りは分かるんだな」

「きゃう♡そ、それくらい分かります！お母様も教えてくれました…うふ…♡

旦那様になる人に…任されば…おのずと赤子を…授かるって…っ♡

「…なるほど」

ちゅう♡ちゅう…レロレロ♡ちゅぷちゅぷちゅぷ♡

「やあ…♡グラニオ様あ…耳、やだあ…あっ…んぐっ…♡う♡う♡」

「君が知らなかったセックスがそれに当たる。いいか、よく聞いてくれ。君のまんこに俺たちのちんぽを入れて、いっぱいズポズポってして、中にビュービューするんだ。…すると子ができる。分かるか？」

「ひい…あ♡」

いつも無表情で真面目なグラニオの口から吐き出される卑猥な言葉に、ステラはぶるぶると震えながら首を横に振る。

「やだあ…やあ…そんなこと…言っちゃやだあ…♡」

「言う。セックスも知らない赤ちゃんがちゃんとお母さんになれるようにセッ

クスを教えないといけないからな。…ルオン」

「分かってる」

舌でツンツン♡とまんこを突いていたルオンがドレスから顔を出した後、スルスル♡とステラのパンツを脱がせてしまう。

「ほら、ドレスの裾、持って」

「や…っ♡」

「やあじゃないの。ほら、体の相性を確かめるってどういうことが教えてあげるから」

「やあだあ…っ♡」

「もう、そんな可愛い顔でいやいやしても逆効果だって」

ルオンが苦笑した後、ステラのドレスをたくし上げ、グラニオの手に渡す。

「やだ…見ちゃやだあ♡」

「…体毛薄そうだなあと、思ってたけど、まさかないとはね♡」

「ふえ…うええん♡」

性器に一向に毛が生えないことを指摘され、ステラは鼻水を啜りながらエグエグと泣き出す。

「なんで泣くのさ」

ルオンがしょうがないなあともいうような顔で立ち上がると、ステラの頬に優しくキスをする。

「可愛いってことだよ。馬鹿にしてる訳じゃないって」

「うそうそうそお！」

「ほんとだよ」

「ひゃあ！」

グラニオが後ろから両足をステラの足に絡ませて開かせると、自分で閉じら

れないようにしてしまおう。

「ま、待って！あ、兄魔族様っ…！」

「グラニオだ」

「んぐ♡」

レロォ♡と耳全体を舐められた後、甘い声で囁かれる。

「言ってみろ、グラニオ」

「ぐら…にお…っ」

「そうだ…上手だな、ステラ」

「んう♡」

グラニオの手が胸元から服の中に侵入してきて、クニクニ♡とステラの乳首をこね回し始める。

「ひう…う♡んう…ふう♡」

「お胸きもちー？」

「う…あ」

俯いて未知の快感に耐えていたステラは、下から覗き込んでくるルオンの美しい顔をぼーっと眺める。

「ルオンが聞いているぞ、ステラ嬢？」

「きゅう♡」

グラニオが返事をしないステラの両乳首をぎゅう♡と摘まみ上げる。ひくんと跳ねたステラの内ももに両手を置いたルオンが、口を大きく開いて、だらあ♡と涎を滴らせる舌を見せつけてきた。

「すてらあ…これで、舐め舐めしてあげるからねえ♡」

「ひっ…！」

ステラはルオンの手に爪を立てて必死にそれを拒否する。

「や…やだ…やだぁ！」

「はは♡毛がないから、ステラのクリトリスがびよ♡って勃起してるの丸見え♡かぁ♡わいい♡」

「ふうう…っ♡」

（なんで…なんでこんな恥ずかしいことするの!?なんでこんな恥ずかしいこと言われないといけないの!?私が、何か悪いことしたから?）

「ごめ…ごめんなひやいっ♡ゆるじで…ごめんなひやい♡」

「あらら、泣いちゃった。どうする？」

「…泣いても続ける」

「うわぁ、鬼畜だね、グラニオ兄様♡」

「黙れ」

「はいはい」

勝手に話を続けるグラニオとルオンに、ステラはたひたすらに謝り続ける。

「ごめ…ごめんなひや…ごめんなさいい…」

「…兄さん」

「…続ける」

「ごめ…ごめんひやい…謝るから…ゆるじでえ…」

「っ兄さん！」

「うるさい！」

「グラニオ様あ…ルオン様あ…」

「くそ！」

「ああ、もう！」

グラニオとルオンはぐしやりと自分の髪を掻きむしった後、ステラの拘束を解いて、ベッドに優しく横たわらせた。

「うえええん」

「もうしないから泣くな。…ちよつと急ぎ過ぎた」

「ほら、もう顔がぐしやぐしやだよ」

「ふえええええ」

「ああ…」

「もう…」

二人が溜息を吐きながらも、嬉しそうな顔をしていることに、泣きじゃくっているステラは気付かない。

「いい子…いい子だね、ステラ」

「ステラ…ステラ…ほら、泣きやめ」

「ひう…っ♡」

右からルオン、左からグラニオに耳元で甘く低く囁かれ、ステラはビクツツと体を震わせた。ぎゅうつとステラが握り込んでいた両手に、それぞれルオンとグラニオの手が絡みつき、スリスリ♡と手の甲を撫でたり、指の間を優しく引っ掻いたりする。

「ステラ♡ステラ♡ほおら♡泣き止んで♡」

「ステラ♡もう怖いことはしない♡約束だ♡ステラ♡」

「ひっ♡あ…んう♡んっ♡」

蜜のように蕩けた顔で自分の名前を何度も呼ばれ、ステラは顔を真っ赤にし
ながらコクコクと頷く。

「も、もう泣き止みました…っ！泣き止みましたからあ…っ♡」

「ほんと？まだ瞳が潤んでるよ？」

「泣き虫なんだな、ステラは…」

「ひゃああん♡」

かぶ♡と二人が同時にステラの耳朶を甘噛みした。ステラはピン♡と動きづ
らい足を伸ばして甘い刺激に耐える。

「やあ…やだ…やだ…！ビボル…ビボルう！」

ステラは思わずもはや友人と言える中になったドラゴンの名前を呼んだ。

「ん？ビボル？ビボルを呼びたいの？いいよ」

「ビボル」

「はい」

グラニオが名前を呼ぶと、床に黒いモヤでできた穴が現われ、そこからビボルがふわりと浮かび出てきた。

「ステラが呼んでいる」

「ん？どうしたの、スーちゃん？」

ラフなシャツとズボン姿のビボルがきょとんと首を傾げてステラに歩み寄ってくる。そして、ギシッと音を立ててベッドに膝を乗せると、上からステラを優しいまなざしで見下ろしてきた。

「スー？」

「は…え…」

（ビボルって…こんなにかっこよかったかしら？）

眠いのか少し気だるげな瞳と口調。いつもきれいに整えられている髪が少しだけ崩れている。シャツのボタンが開けられていて、逞しい胸板が露になっていた。

「あ…の、その…わたし…」

「ビボルに舐めてもらう？」

「ひっ…♡」

ちゅるう♡と音を立ててルオンがステラの耳を吸い上げる。

「ビボルと随分仲良くなったんだね。仲良しのビボルだったら、お股舐め舐めされても怖くないでしょ？」

「ああ、そうだな。大丈夫、俺たちがちゃんと手を握って頑張れって応援してやる♡」

「何を言って…っ」

「…ああ、なんだ。僕も参加していいのか」

きよんとした顔をしていたビボルの瞳がに♡と細められ、いやらしく舌なめずりをする。

「スー、僕も仲間に入れてくれるんだね♡嬉しいよ♡」

「は…え？」

「ほら、お行儀よくお股開けるかな？」

ビボルがステラの頬に優しくキスしながら、内股をすりすり♡と撫でる。ステラはいつも自分と一緒に笑ったり怒ったりしているビボルの妖艶な姿に圧倒され、ガチガチに固まってしまっていた。

「私の…ビボルは…？」

「…スーのビボルはここにいるでしょ？」

ビボルの顔がふわりとほころぶ。そして口をカパリと開いて体格の割に大き

くて長い舌をステラに見せた。

「これで舐め舐めするだけ。大丈夫、怖くないよ。気持ちいいことだけ…。僕はスーに嫌なことしないだろ？」

「最初…劣等種って言ったわ！」

「はは…最初はね…」

ビボルがステラの頬、首、胸、腹、太もも、内ももの順に唇を落とした後、ステラの性器の前で止まった。

「ああ…クリが腫れてるね♡…グラニオ様とルオン様にいいじされたの？」

「ひやああ♡」

ビボルに「ふー♡」と息を掛けられ、ステラは思わずグラニオとルオンの手を握り込む。すると二人もまたビボルと同じように顔をほころばせた。

「腫れたところ、ビボルに見てもらわないとね？」

「腫れたままだと悪い菌が入って大変なことになるかもしれないぞ？」

ルオンとグラニオがスリスリ♡とステラの頭に顔を摺り寄せながらそう囁いてくる。性の知識が全くないステラは真っ青になってぶるぶると震え出した。

「ど、どうしよう…腫れたらダメなんですか？」

「…ああ、ダメだな」

「ビボル」

「はい♡スー、自分で開いて、腫れてるとこ、僕に見せられるかな？」

「あ…♡そんな…♡」

「どこか悪いところがないか見るだけだよ。これは治療だから、恥ずかしくなんかない。中也腫れてないか確認しないといけないから…ね？」

「う…うん」

「…はあ♡じゃあ自分で…指で、開いて？」

「んうう♡」

恥ずかしさのあまりぎゅうと目を閉じながら、ステラが自分の指をまんこのふちに引っ掛けてぐに♡と大きく開く。ビボルはステラに見えないように、口の端からあふれ出しそうになる唾液を静かに啜っていた。何も言わないビボルに不安になったステラが、泣きそうな声を出す。

「ビボル…、ねえ、どうかしら？ 私、変になってるの？」

「…もうちょっと指で開いて」

「そんな…っ！」

「僕も手伝ってあげるから」

「ひ…ああっ♡」

ビボルの手がステラの指に添えられ、ぐに♡とさらに大きくまんこを開かされる。

「…うん、クリも中も真っ赤に腫れてて可哀そうだね。これはちゃあんと治療してあげないと。…いいですね、グラニオ様、ルオン様？」

「ああ、俺たちはステラを慰めないとだから」

『治療』はお前に任せる」

「承知しました」

ビボルが長い舌の先を器用にクニクニ♡と動かしながら外に出す。そして、チロツ♡とステラの真っ赤に腫れて勃起したクリトリスを舐めた。

「きゅん♡」

「…やらしーね」

「へ…え？」

「ううん、何でもない。じゃあ腫れが引くように舐め舐めするからね」

「う、うん…っ…んううう♡」

レロオ♡とビボルの舌がステラのクリを舐め上げ、ちゅうちゅう♡と吸い上げる。

「ひっ…んう…んやああ♡」

「ステラ、今どう感じてるか教えて」

「ルオン様あ…っ♡」

「ほら、ちゃんと教えてくれ」

「ひう♡」

ルオンとグラニオの手がステラの服の中に入り、クニクニと乳首を弄つてくる。

「おっ…♡んおう♡」

（な、なにこの声…っ♡こんな…はしたない声…私が出してるの？）

ちゅうううううう…♡♡♡♡

「ひあああん♡」

ビボルがクリを強く吸い上げてきて、ステラは腰を跳ね上げようとする。しかし、グラニオ、ルオン、ビボルの3人の手が腰をぐうっと押し返してくるせいで、ステラはうまく快感を逃がすことができない。

「いやああ♡はなじ…はなじでええ！」

「ダメでしょ、ステラ。ステラは足が弱いんだから、突っ張ったら痛めちゃう」
「ステラ、動いて気持ちいいを逃がそうとするな。そのまま全部受け止めろ」

「ひぐううう…♡♡♡」

「んう♡ちゅうう…ステラ…んう♡スーちゃん…♡んむう♡大丈夫だよ…ぢゅうう♡僕が…んむう♡んっ♡んっ♡スーちゃんのおまんこ、ちゅるる♡ちゅあんと治してあげるからね♡」

「やだああ♡いやああ…これ、やだ、変なのっ♡お股が…っ♡やだああ♡」

度を超えた快感に、ステラが目を見開き暴れ出すが、男3人がかりで押さえつけられて逃げ出せるはずもなかった。

「んゝ、暴れちゃダメだって言ってるのに…」

「悪い子だな…、スーは♡」

「あ…え…?」

にゅぷう…ぬぷぷぷううゝゝゝ♡

「ぎっ…♡♡」

グラニオとルオンの指が一本ずつ、ステラのまんこの奥へと沈み込んでいく。そしてその後を追う様に、ビボルがクリをちゅうちゅう♡と吸い上げながら、自分の指もぬぷう♡と挿入した。

「あ…う…おっ???おおお???」

「うは♡お顔、訳分かんないって表情してる…♡」

「ひっくい声も可愛いな、スー♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡

「おっ♡おぉおぉ～～♡♡♡」

グラニオの指が子宮口を、ルオンとビボルの指がGスポットをトントン♡と押してきたり、カキカキ♡してきたりして、ステラはまた腰を跳ね上げようとする。そしてまた押さえつけられた。

「ばやああ♡あだま、おがじくなるっ♡変なのっ♡はなじでええ♡」

「こんなことでダメになってたら、子作りなんてできないぞ、スー♡」

「ほら♡頑張れ頑張れ♡」

「んうう♡んおおおお～～♡」

「イケ♡」

「イケ♡」

「イケ♡」

「[[イケ♡♡♡]]」

「いっ…ぎゅうううう…♡♡」

グラニオとルオンに耳元で囁かれ、ビボルからも低く唸るような声で言われたステラが白目を剥いて絶頂する。ぷしゅう♡とまんこから吹き出す愛液をビボルがうっとりとした顔で全て飲み干した後、口周りをベロリと舐めて顔を離れた。ステラはがくがくと痙攣しながら、とつくに気絶していた。

3人は目を怪しく光らせ、ステラを見下ろしていた。